

「関西共通語」についての覚書 ―付・「キヤン」と「カタス」―

A Memorandum of Kansai Common Language : Add to Kiyon, Katasu

キーワード：関西共通語・キヤン・カタス

増 井 典 夫

MASUJI Norio

一、はじめに

本稿は、学生時代からずっと頭の中にあつた「関西共通語」について、まとめてみようと思つたものである。

この事項については、これまで何度か論文にまとめようと試みてきたが、まとめ上げられず、中断、ということを繰り返してきた。そして、今回も力及ばず、という結果で終わるものしかまとめられなかつた。残念ながら、専門的に評価されるレベルの記述には至らずである。ただ、今回は、自分は知識不足であり、力不足であるが、投稿をやるめることはせず、自分の、二〇二三年から二〇二四年時点での「研究の現在地」を、「覚書」という形ではあるが残すこととした。愛知淑徳大学文学部国文学科の「国語学科目」での、一年生向け入門科目である「国語概説」で講義しているレベルのものに過ぎず、専門的な研究としては、とても評価出来ない、そんな低レベルのものに終わって

いるのではあるが、たとえ途中段階ではあつても、一つここに示すことで、自分なりに前に進むための一ステップとしたつもりである。

ただ、この今回の拙稿だが、「付」として二点示した部分については、いろいろ意見を伺うことが出来れば、と考えている所である。

「付」の一点めだが、「関西共通語」ではなく関西の一方言についてのものである。筆者の出身地の方言である滋賀県甲賀方言、そこで見られる「キヤン」について、今一度確認をお願い出来ればと考え、ここに記したものである。

もう一点、「片付ける」の意味での「カタス」の関西での使用、特に京都での使用については、新情報、と言えるものではないか、と考えた。この「カタス」も「関西共通語」と言うのはちょっと難しいものか、とは考えている。

二、「標準語」と「共通語」について

それでは、ここから「関西共通語」について、考えを述べていく。まずは、「標準語」と「共通語」の違いについて、私見を述べるところから始める。

「標準語」とは、「全国共通語」を国語の規範として高めたもので、正式な場で使うべき言葉、とされる。また、「文法的に正しい」言葉とされ、日常の話しことばを拒否するような面もある。

一部「全国共通語」とは違う部分があるのだが、その違う部分を「間違い」などとしてしまう所があったりする。

「間違い」などと決めつけず、「共通語」は「話しことば」で、「標準語」は「書きことば」なのであり、違って当然、と捉えられればいいのだが、そうは判断出来ない人は一定数いるようである。

「共通語」と「標準語」の違いの例として二つほど挙げる。例えば、一段活用動詞の可能性についてである。

「見る、着れる」などという「ら抜き言葉」と呼ばれたりする言葉は、新しい「共通語」と認めてよい、と考えられる。

一方、可能の意味で用いられる「見られる、着られる」などの語形は「標準語」の語形と言える。一方、「見られてしまった(受け身)」や「見られますか?」(尊敬)といった用法は「共通語形」と言えるだろう。受け身の用法は、標準と見てもよいが、尊敬用法は標準とは認めない人もいるようである。

次に、「形容詞の終止連体形」の副詞的用法の場合である。

「すごいきれいだ!」などと「共通語」では言うのだが、これを、「すごいきれいだ」と、「すごい」ではなく「すごく」という「形容詞連用形(非音便形)」にしなければならぬ、と捉えるのが「標準語」だ、

と考える。

三、「全国共通語」と「地方共通語」について

さて、一般的には「共通語」と言えば「全国共通語」であろう。また、「共通語化」と言えば「全国共通語化」であろう。

しかし、「共通語」及び「共通語化」については、もう一つ、「地方共通語」及び「地方共通語化」についても検討しなければならない、とも考えている。

「地方共通語化」については、『関西弁事典』(二〇一八年刊、ひつじ書房)において次のように記述されている。

各地の中核都市がことばの発信地となつて、その地域に暮らす人びとの生活圏内・行動圏内のことばが均質的になつていく現象がある。これを広域方言化、あるいは地方共通語化と呼ぶ。

関西でも、各府県内、および府県間のことばの地域差が薄まり、関西共通語(関西弁)と呼べそうな一つの言語変種へと収斂する方向に進みつつある。(高木千恵、同書三七七頁)

さて、方言学上では、「地方共通語」は、「関西共通語」の他に、「北海道共通語」や「沖縄共通語」についてなどが論じられてきた。それらについて先に、簡単に触れておく。

まず「北海道共通語」だが、「北海道人が全国共通語だと捉えているもの」のだが、実際は一部「ッッシュョ(っでしよう)」「イイッシュョ」「ウマイッシュョ」などと使う)や「シタツケ(そうしたら)」などの北海道方言が混じっているものを指す、とされる¹⁾。

一方、「沖繩共通語」だが、「ウチナーグチと呼ばれる（首里の言葉が元となったもの）沖繩全県に通じる言葉を指す、とされてきた²⁾。しかし、二〇二一年現在、「ウチナーグチ」が沖繩全県で通用するとは考えられなくなっている状態だとされ、「沖繩共通語」という概念自体、意味を持たない状態になっている、とも言われているものである。

四、「関西共通語（関西弁）」という捉え方について

さて、本稿で主に考えたいのは「関西共通語」である。

「関西共通語」は、一般に「関西弁」と呼ばれるものである、としていいであろう。その「関西」は「近畿」と同義で、近畿地方で一般に通じる言葉を指すと一般には、捉えられていると思われる。

まず、「関西弁の範囲」について『関西弁事典』を見ると、

近畿地方の方言は研究上「近畿方言」として区画され、一括して扱われることがある。その範囲は主として京阪式アクセントの領域を重視して設定されたものである。（略）一般に「関西弁」と称されるときは、関西の代表と見なされている大阪府と京都府でこのことを指すことが多い。（『編集方針』iii頁）

というようにまとめられるものである。

しかし、実際の所、「関西共通語」は「大阪方言」を指すと考えて良いのではないか、とも考える。

一方、「京都方言」や「神戸方言」などは「関西方言」の一部だが、「関西共通語」とはされないものであろう。例えば、「そうどす」（京都方言。共通語では「そうです」）や「何ユートー」（神戸方言。共通語では「言っ

「関西共通語」についての覚書（増井典夫）

てる」。他の近畿地方の方言では「ユートル」または「ユートル」などは、「地域方言」であって「地方共通語」ではない、と考える。

五、ことばの東西差と関西方言について

この項では、言葉の東西差について、基本と考えるところを挙げ、そのうえで、関西方言の位置づけについてまとめてみたい。まず、一九六二年刊の『近畿方言の総合的研究』（楳垣実編、三省堂）の「近畿方言総説」の「文法」の冒頭部分の記述を上げる。

近畿方言は、西日本方言の中心でもあり、また西日本方言を代表するものでもある。だから、だから、西日本方言に共通の特徴は、同時に近畿方言の特徴でもある。そこで、まず西日本に共通の特徴をあげておこう。

- 1 動詞・形容詞ウ音便。（コオタ「買った」、アコオナル「赤くなる」。）
- 2 動詞イ音便。（オトイタ「落とした」、ダイテクレ「出してくれ」。）
- 3 動詞命令法。（オキヨ・オキイ「起しろ」、ネヨ・ネエ「寝ろ」。）
- 4 打消の助動詞。（カカン・カカヘン「書かない」、オキン・オキヤヘン「起さない」。）
- 5 断定の助動詞。（ソージャ・ソーヤ「そうだ」。）
- 6 補助動詞。（フットル「降っている」、フリヨル「降りつつある」。）

この六例が、東日本と西日本の両方言最も大きな相違として、注意されてきたものだった。これらは、中部地方を境として、かなりはつきりと東西に分かれている。もちろん各例によって境界線は同一ではないが、親不知―日本アルプス―浜名湖の線が中心となっている。これらは近畿方言でも、だいたい特徴的な用法と

考えられる。(同書二九〇頁)

次に、一九八九年刊の『愛知県方言』(山田達也編、愛知県教育委員会)を見ると、「日本の方言を二分するような大きな特徴の境界線がいくつか見いだされる」とし、これらの特徴を示す特徴として、次の八項目を挙げている(同書六頁〜八頁)。

- ①サ行五段動詞の過去形(出シタか出イタか等)
- ②一段動詞命令形(起キロか起キヨか)
- ③動詞の打ち消し(行カナイか行カンか)
- ④動作の継続状態(シテルかシトルか)
- ⑤形容詞連用形(白クナルか白ウナルか)
- ⑥断定の助動詞(ダかヤ・ジャか)
- ⑦ワ行五段動詞の過去形(買ツタかコータか)
- ⑧アクセント

それらのうち、先に、①、③、④、⑥、⑧での、愛知県の現在の状況について、簡単に補足し、また近畿の状況について簡単に記述を加えることとする。

①「サ行五段動詞のイ音便形」は、かつては「西日本方言の特徴」と言われたものである。

一方、一九八九年の時点では、「中部日本的言い方」とまとめられている。これは、先の『近畿方言の総合的研究』では、

近畿中心部では「差した」がサイタとなることがある以外に、サ行イ音便はなくなっているが、これは学校教育の影響もあり、

また都会での規範意識の強いことのため、訛りが田舎くさい発音として嫌われる傾向が強いことの結果だろう(同書二五頁)

などであるものであった。

③「動詞の打ち消し」で、行カナイか行カンか、であるが、近畿方言では「ヘン」が基本となる。その「ヘン」は名古屋方言でよく見られた「セン」が変化したもの、とされている。

s音がh音に変化したもの⁽³⁾としては、「ナサル」が「ナハル」に変化した、というものも挙げられる。

④動作の継続状態で、東の「シテル」か西の「シトル」(または「シヨル」)かといわれたものである。ただ、近畿でも中心部の京都大阪では「シテル」を多く使用、簡単に東西には分けきれないものでもある。

⑥断定の助動詞。東の「ダ」か西の「ヤ・ジャ」か、といわれるものだが、名古屋で「ダ」であっても西尾張では「ヤ」を使用、岐阜でも「ヤ」を使用する。近畿方言での「ヤ」は岐阜県や北陸地方を含めた西日本のかなり広い地域で使用される、とまとめられる。

とは言え、七つの語法上の特徴以上に、「関西弁」を印象付ける特徴は、やはり⑧のアクセントである。語法的には全国共通語のものを使用していると思われる場合でも、アクセントが関西のものだとそれだけで「関西弁」と認識されたりすることもあるようである。

さて、近畿の人間が全国共通語を意識し、共通語を使っている意識の時の発話でも、断定「ヤ」の他、敬語の「ハル」や副詞の「ホンマニ」等はよく現れる印象がある。

例えば、大阪の人が明らかに共通語を意識している、そんな場面で、次のような発言をされたのを聞いたことがある。

○言わハル通りで、ホンマニそうヤと思います。

こういった特徴のある発話とそこに現れる事象が関西共通語の具体的な例と言えるのではないか、などと考えている。

六、イテルについて

ところで、大阪で非常に良く使われ、京都などでは余り使わない表現として「イテル」がある。共通語では「イル」、で西日本では「オル」が多いが、京都では「イル」が多い。

このイテルについて少し考えてみる。

まず、『関西弁事典』三三頁の「いる（居る）」をイテルと言うこと（真田信治）の記述を見てみる。

標準語での「いる（居る）」には、「存在する」という意味と、「存在している」という二つの意味がある。しかし、大阪では「イル」もあるが、それより「イテル」という形式がよく現れる。また「オル」や「イトル」もある。「イル・イテル」は「オル・イトル」と比べて相対的に丁寧度の高いものとして運用されている。この「イテル」「イトル」を、「イ+テ+イル」「イ+テ+オル」と考えると、無意味な重複のようにみえる。しかし、これは、大阪での「イル」が、まだ十分には状態化しきっていなかったことによる結果なのではなからうか。そこで状態性を表すために、状態化形式である「テル」「トル」を付加したのだと考えるのである。

「イテル」についての妥当と思われる記述である。

「関西共通語」についての覚書（増井典夫）

ただ、

○大阪でなぜ「イル」の状態化が遅れたのか

は、問題として残っている、と考えている。

また、次のような記述もある。

なお、大阪では、この「イテル」を標準形式であると認識している人も多い。（『関西弁事典』同三三頁）

大阪に限ってみれば、「イテル」は「関西共通語」と認識されているものと考えても良いのではないか、などと考えてみたりしましたが、さすがにそれは無理があるか、などと考え直したりもしたりしている、そんな語形である。

七、関西の「ネオ方言」について

ここで、「ネオ方言」についてまとめていく。

「ネオ方言」とは、『関西弁事典』の記述によると、「標準語（本稿では「全国共通語」とする）の干渉を受けて形成された方言スタイル」（同書四八九頁）である。

例えば、「共通語「来ない」の一般的な方言形と考えられるものは京都及び滋賀の多くではキーヒン、大阪ではケーヘンであるが、「ネオ方言」とされるのは全国共通語形「コナイ」と接触して生まれたとされる「コーヘン」という語形である。

あるいは一般的な方言形とされる「イカヘンカッタ、イケヘンカッタ」

六七

が全国共通語形「イカナカッタ」と接触した結果生まれたとされる「イカンカッタ」などが「ネオ方言」とされるものである。

これらの「ネオ方言」が「関西共通語」と呼べるものとなっていくのかどうか。可能性はあるかとも思うのであるが。

八、付一・滋賀県甲賀方言に見られる「キヤン」

前項まで、「関西共通語」につながるかと思われる事項について、私見をつらねてきたが、残念ながら、専門的に、評価出来ると考えられる検討考察を示すことは難しかった、と認めざるを得ない。

さて、ここからは、「関西共通語」とは言い難いものではあるが、個人的に気になる関西の中の言葉について、二点挙げていく。

まずは、滋賀県における、甲賀方言についてである。

甲賀方言（滋賀県南東部方言、甲賀市は三重県伊賀市と隣接）は、かつては湖南方言（京都方言的な特徴を持つ）と一括（『近畿方言の総合的研究』等）されていたが、近年は甲賀方言と湖南方言は別にすべきとされるようになっていく。

次に酒井雅史二〇一四の記述（『滋賀県長浜市方言』の章の「滋賀県の方言区画」）を引用しておく。

滋賀県の方言は、地域差の大きい方言であるとされ、旧木之下町・旧長浜市を中心とする「湖北方言」、彦根市・近江八幡市・東近江市を中心とする「湖東方言」、今津町を中心とする「湖西方言」、大津市を中心とする「湖南方言」、湖南市・甲賀市を含む「甲賀方言」の5つに大別される。（略）甲賀方言は、大きくは湖南方言域とされるが、尊敬語形式やアスペクト表現など語法面において三

重県伊賀方言や湖東方言と重なるところがあり、湖南方言とは区別される。（『全国方言文法辞典資料集（2）、活用体系』（方言文法研究会編、科学研究費研究成果報告書、八二頁）

なお今津町は現高島市である。

さて、共通語で「来ない」の意味の表現（「来る」の打ち消し形）として、湖南方言では「キーヒン」の使用が多いが、甲賀方言では「キヤン」という語形⁴が見られる（なお、「見ない」は「ミヤン」、「しない」は「シヤン」）。

これは『近畿方言の総合的研究』の「滋賀県」の項（寛大城）には記述が見られないものであり、『関西弁事典』の「滋賀県の方言概説」（松丸真大）にも記述が見られないものである。しかし、かつて日本方言研究会の場で指摘された⁵ものである。

今一度、甲賀方言の打ち消し形の「ヤン」、特に「キヤン」についての調査検討と記述が望まれる所だと考えている。

「来る」の打ち消し形として、三重県、奈良県、和歌山県などでは「コヤン」という形が見られる。この「コヤン」という打ち消し形と、滋賀県湖南方言に多く見られる「キーヒン」の中間形が「キヤン」という語形ではないか、なども考えている。

なお、「片付ける」であるが、甲賀方言では関西の伝統方言形である「ナオス」は使わず、共通語形の「カタツケル」のみである。この点でも湖南方言とは違いを見せるものだと考える。

九、付二・関西での「カタス」

「片付ける」は、関西では伝統方言形として「ナオス」が使用される

とされる（滋賀県甲賀方言では「片付ける」のみ）。他に、関西では「カタス」の使用例も見られる。

まず、『関西弁事典』の記述（鳥谷善史）を見てみる。

関西弁では、「片付ける」や「しまう」ことを伝統的にナオスという。ナオスは標準語では、修理や修繕をするという意味である（略）なお、カタスは東京方言である。（同書三二頁）

図は、同書三二頁で示されているもので、「新方言全国地図（簡略版）」（図八「片付ける」三六五頁）（『大都市圏言語の影響による地域言語形成の研究』岸江信介編、二〇一一年、科学研究費・研究成果報告書）から関西地域を取り出して示されたものである。



さて、鳥谷は「カタス」を東京方言としているのだが、京都在住の作家による作品の中に、次のような「カタス」の使用例が見られる。作品の舞台も京都である。

鳥有は鳥取の布団を片すと、ゆっくりと鍵を開けた。（麻耶雄嵩『痾』、（八七頁二一〜二二行、一九九五年、講談社）

麻耶雄嵩は一九六九年三重県上野市（伊賀市上野）生まれ。京大文学卒業、現在も京都在住の作家である。

麻耶が「カタス」を東京方言と認識していたとは思われない。が、全国共通語だと認識していた可能性はなきにしもあらず、だと思われる。

ところで、最近、「カタス」は京大内では日常的に使用されるいわば「キャンパス言葉」だったのではないか、との情報⁶を得た。

そうであれば、麻耶の使用例も腑に落ちるものだ、と思われる。

関西での「カタス」の使用、特に京大内以外での使用については不明な部分が多いと思われる。今一度調査検討の必要があるものだと考えている。

さて、先に麻耶の捉え方として書いたように、「カタス」が全国共通語（ただし、かなり新しく、俗な感じで捉えられる）とみなせる可能性はなきにしもあらず、などと考えるが、さすがに「関西共通語」と捉えるには無理があるか、と思われる。「関西人が考える共通語」の一例だ、とすることは出来るような気もしているが。

十、おわりに

「はじめに」で書いた通り、本稿では、「関西共通語」については専門的には評価出来るようなものを示すことは出来なかった。

しかし、今後も検討は続け、少しでも考察を前に進めたい、と考えている。今後も努力していきたい。

ただ、付とした二点については、全く価値なしとは考えない。その点について、今一度ここに書いておく。

一点め、「打ち消し形」の「〜ヤン」の使用語形のうち、特に「キヤン」については、かつて指摘があったものではある。しかし、改めての確認が必要なものであろう、と考えているものである。

もう一点、「京都でのカタス」については、新たな観点での考察が必要なものではないか、と考える。そこで、本稿で記述を行うこととしたものである。その点を再度記しておくこととする。

【注】

- (1) 『北海道のことば』（「日本のことばシリーズ 1」、明治書院、一九九七年）等参照。
- (2) 『沖縄県のことば（北琉球）』（「日本のことばシリーズ 47」、明治書院、一九九七年）等参照。
- (3) 特に村上謙は「sh交替」という項目を設け、詳細に検討している（『近世後期上方語の研究』、二〇二三年、花鳥社）。
- (4) 「キヤン」について、『近畿言語地図』（岸江信介他編、二〇一七年、徳島大学総合科学部）に基づく「キヤンを探して見ても奈良県に—地点のみ確認できるだけである。」（鳥谷善史「打消しの表現—

関西方言の否定形式の地域差とそのバリエーション」（『地図で読み解く関西のことば』第二章二二二頁、岸江信介・中井精一編、二〇二二年、昭和堂）という記述は見られる。

- (5) 中井精一の指摘による。その指摘は、以下の研究発表（鳥谷善史・岸江信介「関西若年層の否定辞「〜ヤン」の使用拡大とその要因について」、第九八回日本方言研究会、二〇一四年五月一六日）の質疑応答の中でなされた。「滋賀県甲賀市出身の宮治弘明がキヤンを使用していた」という指摘であった（宮治は元梅花女子大学助教授。一九六二年生まれ）。甲賀市出身の増井（一九六〇年生まれ）は高校に入るとキヤンを使わず、キーヒンに変えてしまっていたが、この研究発表の後に、甲賀市出身の増井の同級生数人に尋ねたところ、いずれも「キヤンを使用」との回答を得ている。大森望（書評家・翻訳家）の指摘による。大森は一九六一年高知県生まれ。一九七九年から一九八三年までを京都大学で過ごしている。
- (6)